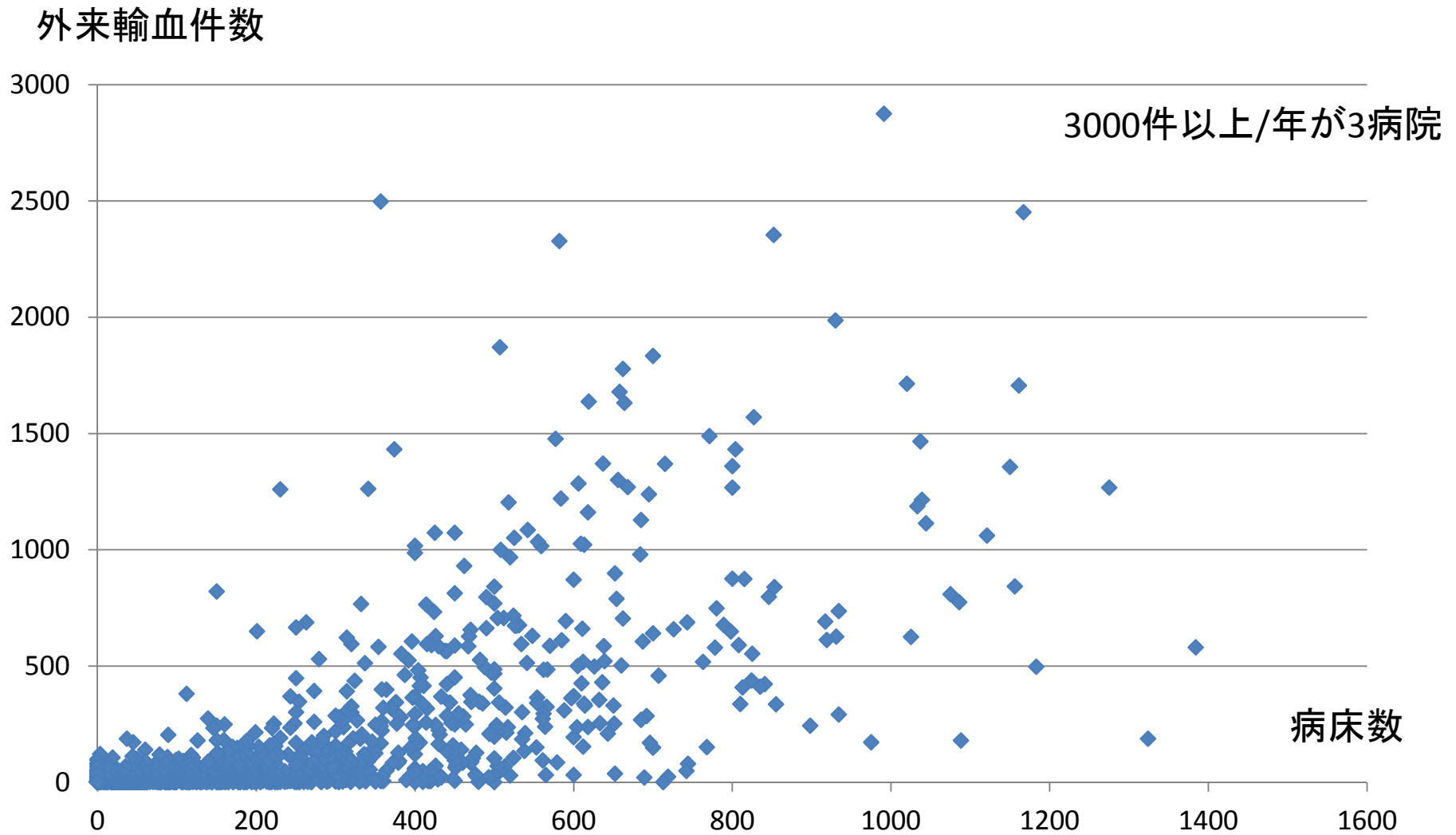


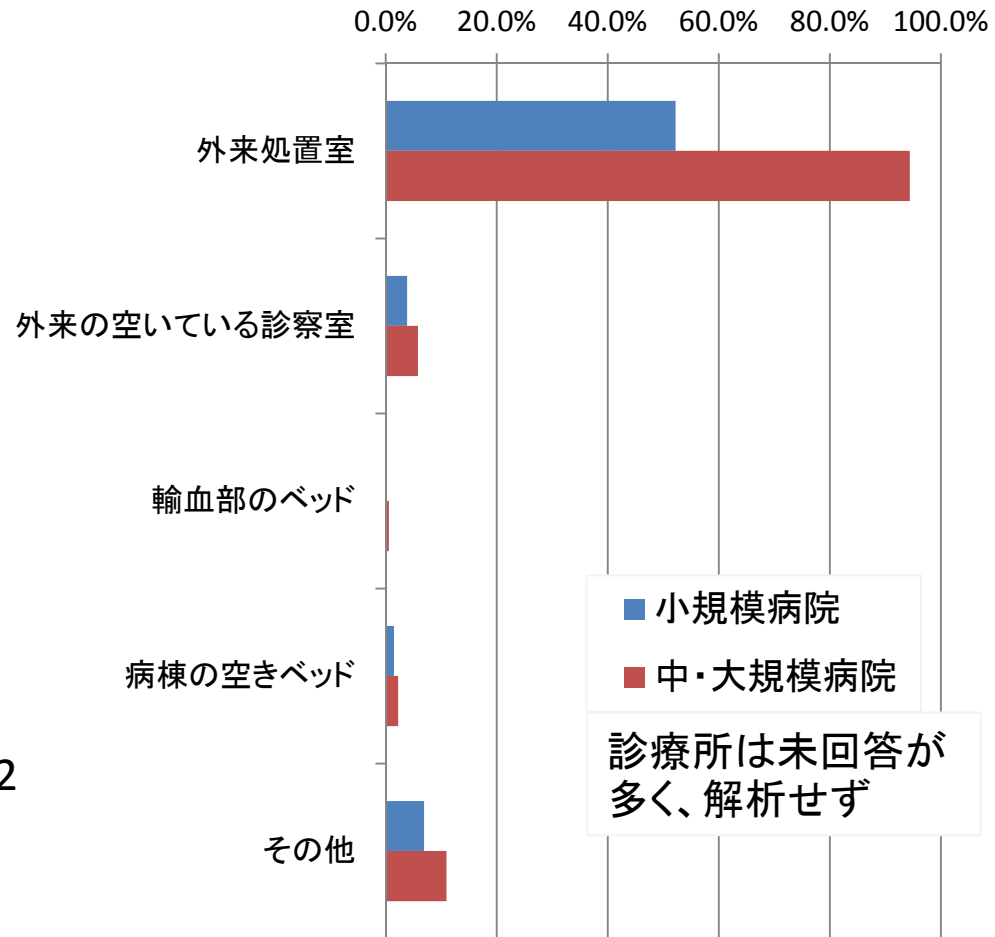
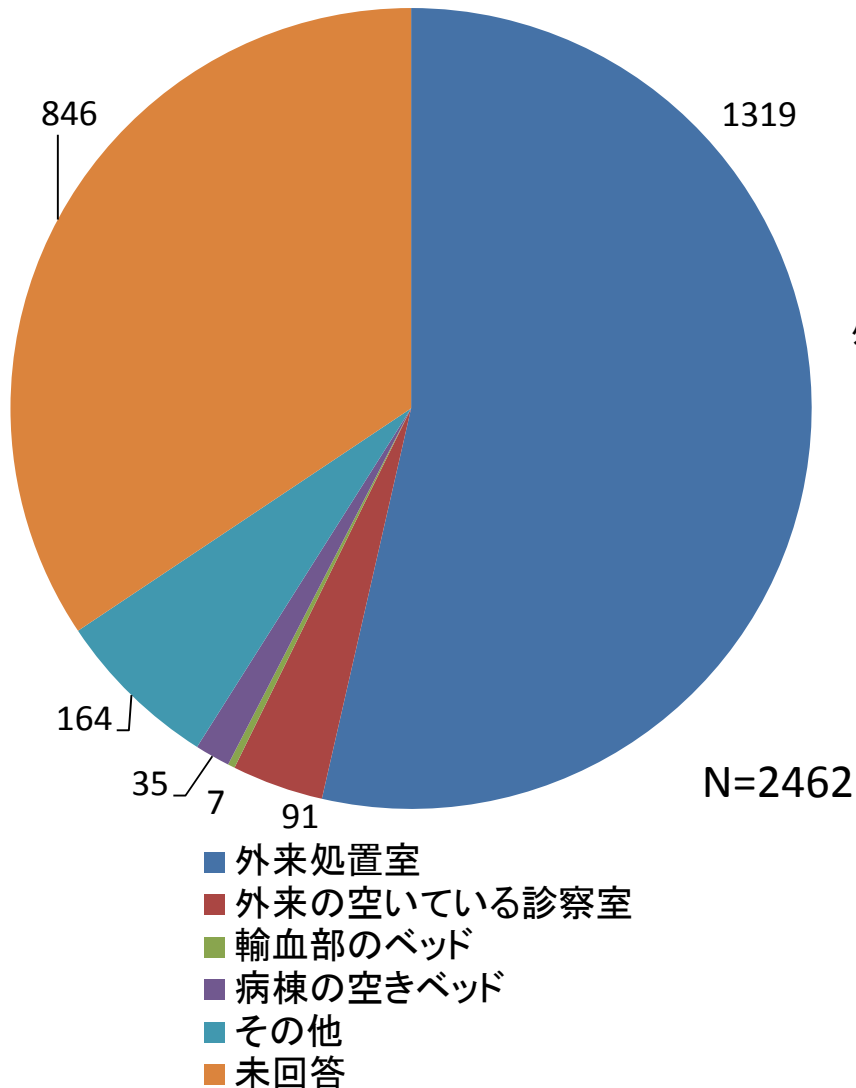
外来輸血

青森県立中央病院 臨床検査部
福島県立医科大学 輸血・移植免疫学
北澤淳一

病床数と外来輸血件数

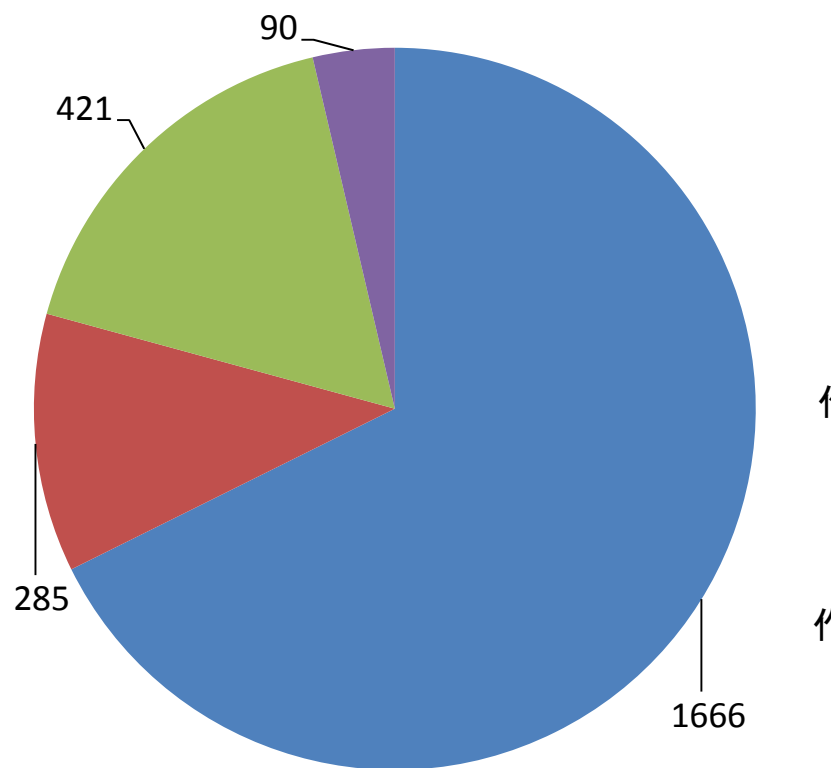


外来輸血の実施場所

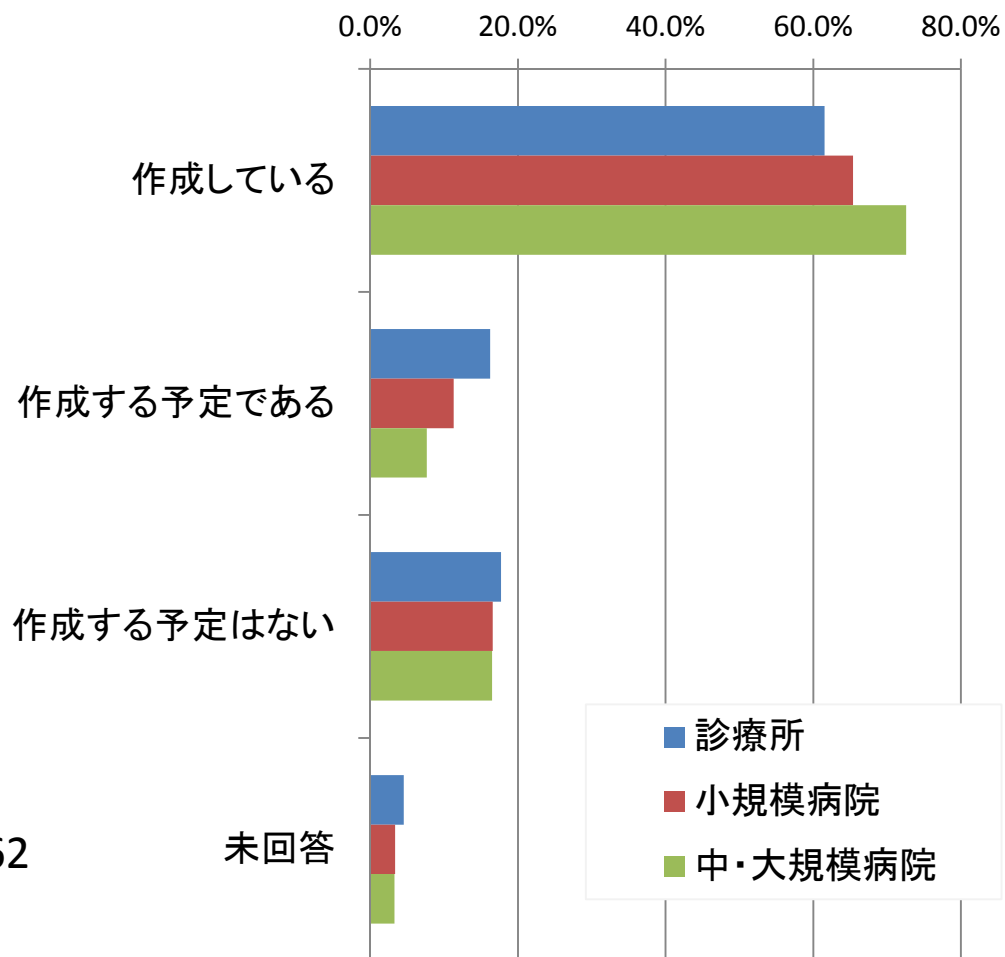


	診療所	小規模病院	中・大規模病院
全施設数	530	1309	667

外来で輸血する際のマニュアルを作成しているか否か

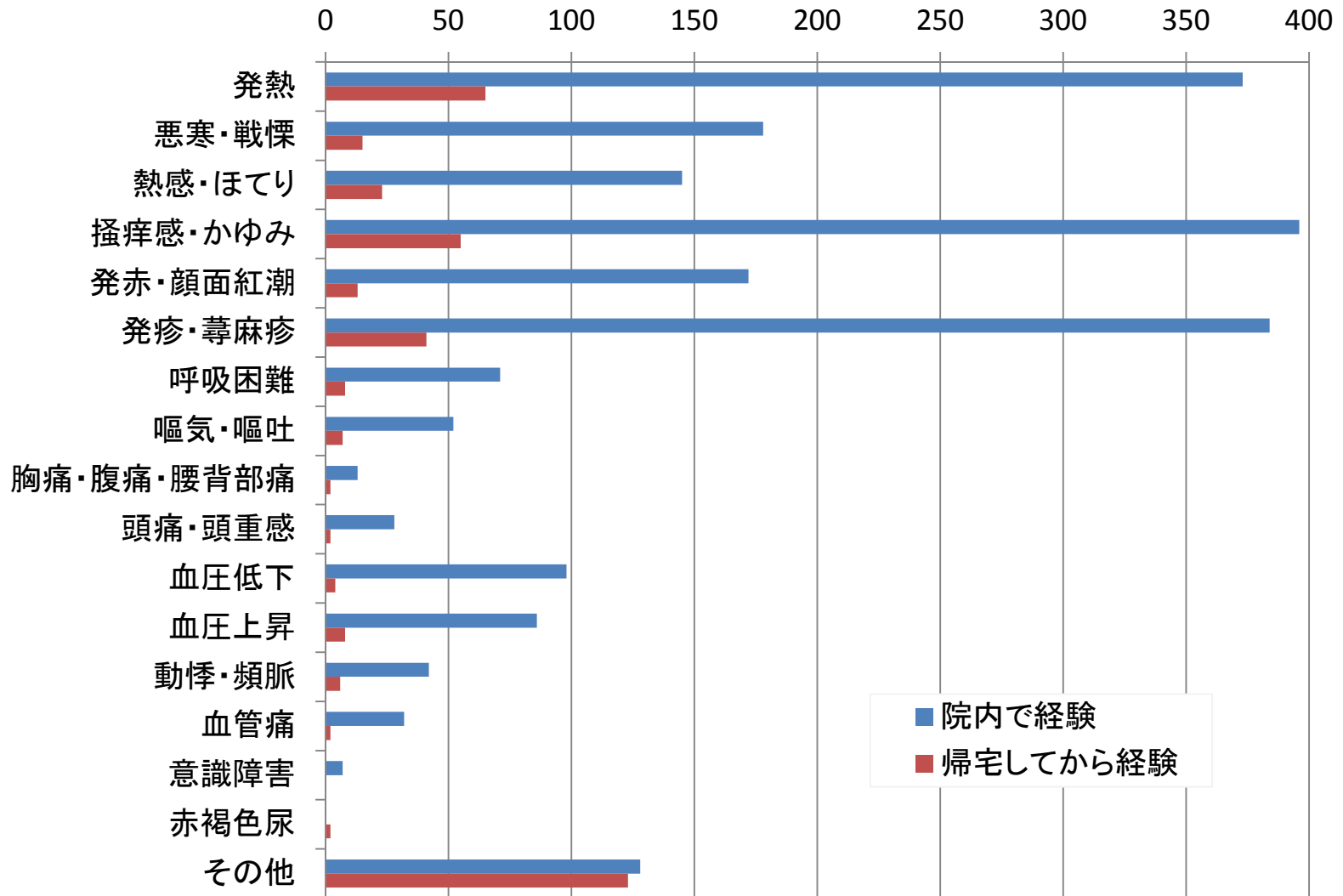


■ 作成している
■ 作成する予定はない
■ 作成する予定である
■ 未回答



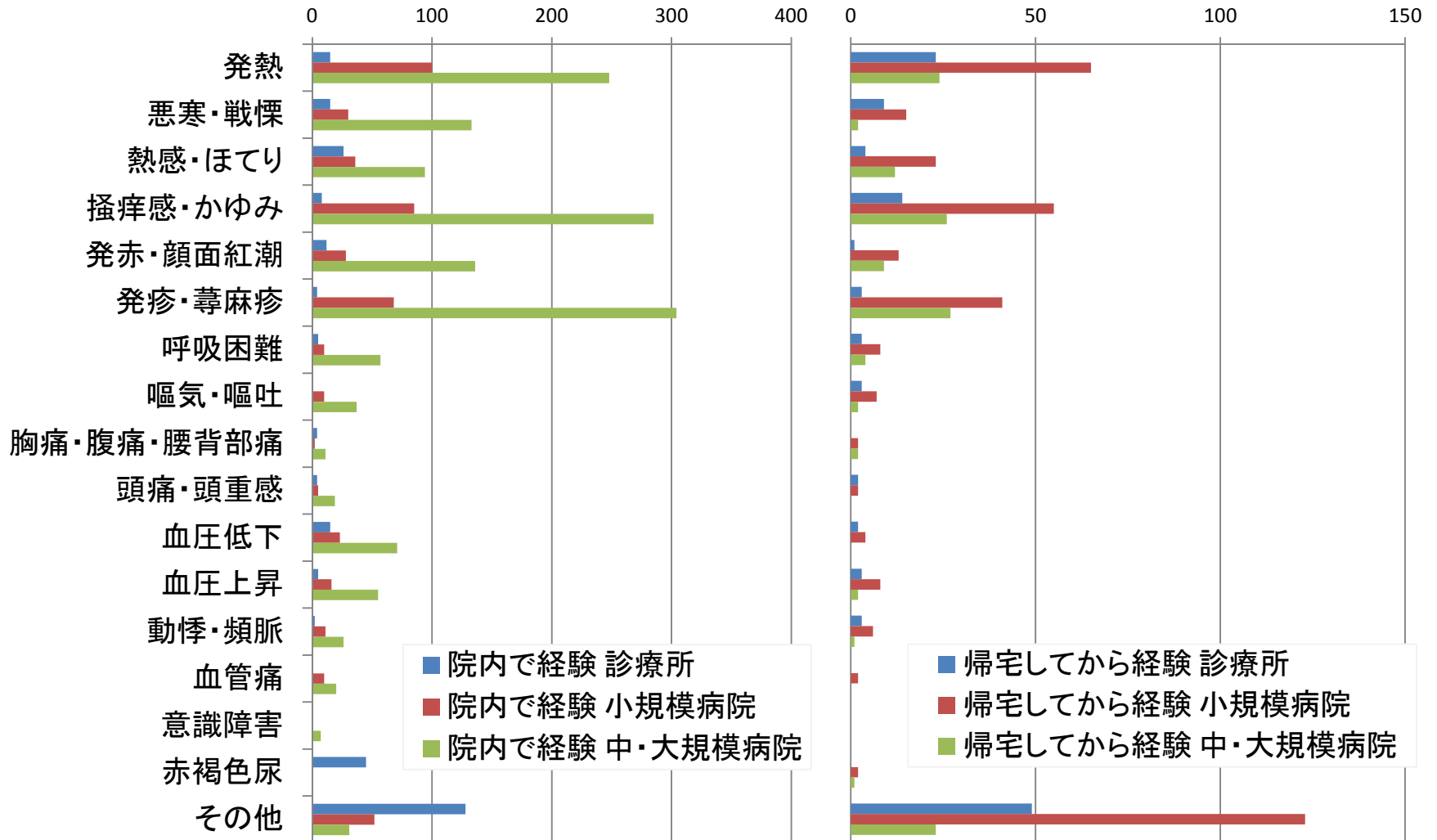
	診療所	小規模病院	中・大規模病院
全施設数	530	1309	667

外来輸血で経験した輸血副反応



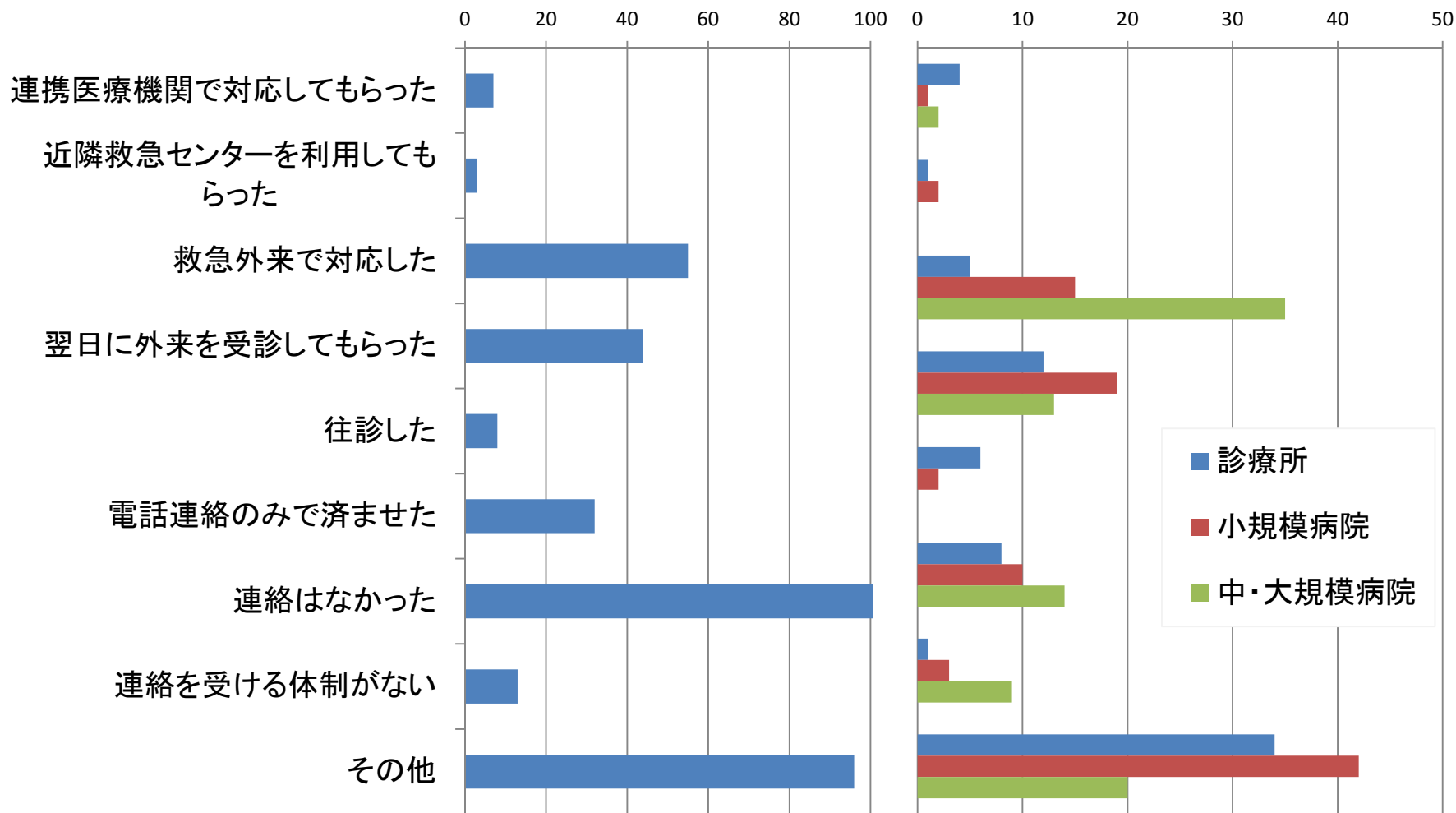
N=2462

外来輸血で経験した輸血副作用



	診療所	小規模病院	中・大規模病院
全施設数	530	1309	667

外来輸血で帰宅後に発生した輸血副作用への対応について



N=2462

	診療所	小規模病院	中・大規模病院
全施設数	530	1309	667

まとめ

- 平成27年調査で外来輸血を実施したと回答したのは2462施設で、平成26年調査の2602施設よりも140施設が減少した。施設形態としては、医療法人関連病院、診療所、公立・自治体病院が多かった。病床数と外来輸血件数を比較すると、病床数が大きいほど外来輸血実施件数が多かった。外来輸血の実施場所は、外来処置室が1319施設と最も多かったが、未回答が846施設と多く、病床別に診療所(19床以下)、小規模病院(20-299床)、中・大規模病院(300床以上)に分類して検討したところ、診療所530施設のほとんどは未回答であった。
- 外来輸血のためのマニュアル作成は、全体では2462施設中1666施設で作成していると回答したが、病床規模別に検討すると、作成している割合は、診療所で60%、中・大規模病院で70%であった。
- 外来輸血で経験した副作用を、院内で経験したもの、帰宅してから経験したものに分けて回答を求めた。院内で経験した副作用は、掻痒感・かゆみ、発疹・蕁麻疹、発熱が多く、いわゆるヘモビジュランスによる報告と同様であった。帰宅してから経験した副作用は、院内での経験より件数が少ないが、呼吸困難などの重篤な副作用の回答が見られた。病床規模別の検討では、中・大規模病院は院内での経験は、発疹・蕁麻疹、掻痒感・かゆみ、発熱の順に多く、帰宅後に経験した副作用も同じ順でおかった。小規模病院では、院内で経験した副作用は発熱、掻痒感・かゆみ、発疹・蕁麻疹の順で、帰宅後の副作用も同じ順であった。診療所では、院内で経験した副作用も数が少ないが、赤褐色尿が最多で、次いで熱感・ほてりが多かったが、帰宅後に経験した副作用は発熱が最も多く、掻痒感・かゆみ、悪寒・戦慄の順であった。
- 外来輸血で帰宅後に発生した副作用への対応は、全体では連絡がなかったが100施設で最も多く、救急外来で対応が55%程、翌日に外来受診が43%程であった。病床規模別に検討すると、中・大規模病院では救急外来で診察したが最も多く、小規模病院・診療所では翌日に外来を受診してもらったが最も多かった。注目すべきは、中・大規模病院の「連絡を受ける体制がない」であろうか。